

# 明るい未来は笑顔の先に

パラサーフィン

加藤 真吾 選手



写真提供:加藤選手

2024(令和6)年アメリカのカリフォルニア州で行われたパラサーフィン世界大会(ISAワールド・パラサーフィン選手権)のスタンダード1(上半身に障がいがあるクラス)で優勝した浜松市出身の加藤真吾選手(49歳)にお話を伺いました。

### ―サーフィンを始めたきっかけは

サーフィンを始めたのは20歳の時。高校時代、バイク事故に遭い、今も右肘から先は力が入らず、グーやパーもできない状態です。友人たちがサーフィンを楽しむ様子を見ていううちに興味を持ち、海に入るようになりました。もともと水泳を習っていたので、パドルリグ(板の上で水をこぐ動作)はうまくできましたが、そこから板の上立つのが難しく、苦労しました。練習を重ねてなんとか板の上に立てた時、うれしさと同時に波に乗る爽快感を感じて、サーフィンの楽しさにすっかり魅了されました。

### ―競技として本格的に取り組み始めたのはいつですか

実は最近なんです。サーフィンを始めた頃はまだ、「パラサーフィン」は競技として確立されていませんでした。長い間、趣味の延長として健常者と同じ大会に参加して楽しんでいましたが、2021(令和3)年に国内でパラサーフィンの大会があることを知りました。初めて参加した時、「こんなに多くの仲間がいるんだ」と驚きまし

た。そこで優勝することができ、もつと上を目指してみたいと思いました。2023(令和5)年、全日本選手権で優勝して日本代表として世界大会に出場することができました。

### ―世界大会はいかがでしたか

初めての世界大会は緊張でかなりガチガチになっていました。「このままでは日本に帰れない」という気持ちで自分を追い込み、途中から開き直って波と向き合うことに集中した結果、2位で表彰台に立つことができました。

2度目の世界大会では、「良い波だけに狙いを定める」と決めました。頭の中をシンプルにして、やるべきことと、やらなくてもよいことを明確にしたところ、焦らず集中することができ、優勝につながりました。

### ―パラサーフィンの魅力は

人それぞれ競技スタイルが違うことです。僕たちは「アダプティブ(適応する)」という言葉をよく使います。例えば、僕は右手は力が入らないので肘を付けて立ち上がりますが、足が不自由な選手は、正座のような体勢で波に乗ることもあります。パラサーフィンは



世界大会優勝直後、仲間と抱かれ笑顔を浮かべる加藤選手

障がいの程度や種類によって9つのクラスに分けられます。各々が自分のハルデイをどのように乗り越えて、波に適応していくのか。それがパラサーフィンの見どころだと思います。

### ―今後の目標は

2032(令和14)年にオーストラリアで開催予定のブリスベンパラリンピックで、パラサーフィンが採用されれば、そこで金メダルを取ることが一番の目標です。

### ―夢を叶えるために大切なことは

「いつも笑っていること」が大切だと思います。世界大会の直前、絶不調だった僕に、日本代表チームの仲間が「うまくいかない時こそ、笑っていればいいんだよ」と声をかけてくれました。悩みがずっと消えて、心が楽になりました。笑顔でいれば、必ず明るい未来が待っていると信じています。

## パラサーフィン体験会

- 会場: 中田島海岸(中央区) / WSL HAMAMATSU OPEN 凧祭 会場内
- 日程: 5月16日(土)
- 主催: NPO法人NOMARK-adapt

凧祭について▶

大会公式 Instagram



体験会について▶

主催者 Instagram



砂浜に埋もれず車いすで移動できるマットや、水陸両用の車いすを用意します。海はみんなに公平です! ぜひご来場ください。

